

語気を表す文末助詞“的”

郭 穎 俠

要 旨

关于位于句末的助词“的”的词性，有多种看法。有的学者认为是构造助词，有的学者认为是语气助词。“的”字的用法很多，词性和意义也不尽相同，从二十世纪五、六十年代起就有学者对其进行分析和整理。但是针对位于句末、表示语气的“的”进行考察的很少。本文拟从语义论的角度，聚焦于表示说话人心理状态的句末助词“的”，对其意义和功能进行考察和分析。在确定“的”字为句末语气助词的基础上，通过对其在实际语言应用中的例句的考察，整理出语气助词“的”经常使用的几种句型，并得出其基本功能与意义为：1 避免句子头重脚轻，2 消除认识上的差距，3 把句子改为陈述语气。通常所说的强调功能和说明功能均由此而来。

キーワード……文末 語気 均衡 認識のギャップ 陳述

はじめに

中国語において、語気を表す形式の一つに、語気助詞がある。文末に現れ、疑問、推量、感嘆、強調、確認、呼びかけなど、話し手の心情・態度を表す助詞である。会話など言語生活の中で頻繁に用いられる。文末に位置する助詞“的”にもこのような用法がある。

“话是那样说，可就是心里怪别扭的。”(p.32)

「そりゃまあそうだけどさ、気持ちわるいよね。」(ノ p.51)

“没有余数的!”“有余数的。”“你错了，没有余数的!”(百 p.248)

「この計算あまりはないよ。」「あるよ。」「おまえ、まちがってる。あまりはないよ。」
(p.133)

“的”の研究は数多く行われ、成果もたくさんあるが、“是…的”構文に関するものが多く、文末に位置して語気を表す“的”だけに焦点を当てるものは少ない。また、文末の“的”に触れた研究の中で、品詞分類や意味用法などで意見が分かれている。

本稿では、このような文末に位置し話し手の語気を表す“的”を語気助詞として全面的に考察し、その意味・機能を明らかにしたい。本文で小説などに現れる文例を考察することにするが、その出典は次のとおりである。なお、出典表示の無いものは作例で、訳は筆者によるもの

語気を表す文末助詞“的”(郭)

のである。

ノ：村上春樹『ノルウェイの森』講談社 1987

(中国語訳) 村上春樹『威的森林』林少华(訳) 上海訳文出版社 2001

メ：渡辺淳一『メトレス 愛人』文春文庫 1994

(中国語訳) 渡辺淳一『曼特莱斯 情人』祝子平(訳) 上海文芸出版社 2000

百：茹志鵬『百合花』人民文学出版社 1978

(日本語訳) 茹志鵬『百合花 他』松井博光(訳) 徳間書店 1990

黒：張承志『黒駿馬』長江文芸出版社 1993

(日本語訳) 張承志『黒駿馬』岸陽子(訳) 早稲田大学出版部 1994

中：『中国語ジャーナル』2004・11 アルク

雪：川端康成「雪国」『日漢対照世界名著叢書 雪国 伊豆の踊り子』吉林大学出版社 1998

四：老舍「四世同堂」(<http://www.51xs.com/xdwx/l/laoshe/sstt/001.htm>) から収集。例文として提示したものは『老舍全集』(人民文学出版社 1999) で照合済みである。

(日本語訳) 老舍『四世同堂』蘆田孝昭(訳) 学習研究社 1982

1. 先行研究

文末に“的”をもつ文は、述語部分が動作・動きを表す場合、すでに事態が発生済みであることを表す。このことについて、細かいところで違いがあるものの、ほとんどの学者が認めている。

“这些办法都是跟张宗昌督办学来的！” (四 20 節)

「このやり方は張宗昌督弁に習ったのさ！」(p.196)

三叔哪一天死的？三叔死在了哪里？三叔怎么死的？(四 28 節)

瑞全おじさんはいつ死んだの。瑞全おじさんはどこで死んだの。瑞全おじさんはどうやって死んだの。(p.310)

しかし、文末に“的”をもつ文は、述語部分が状態や性質、生理活動・心理活動を表す場合何を表すかについては、まだ研究が十分になされていない。この場合、すでに発生済みの事態を表すのではないことは明らかであるが、その“的”の文法的意味・機能はまだはっきりわかっていない。

いままでの研究ではこの“的”の由来や意味について意見が分かれているが、助詞と認める

点ではほぼ同じである。そして、この文末の“的”を、文中のそれと同一視する立場と、文中のそれとは異なり、語気を表すものとして立てる立場と、大きく二種に分けることができる。朱德熙や袁疏林などを代表とする“的”構造助詞論と、邢福義や劉月華などを代表とする“的”語気助詞論がある。

1.1.「的」を語気助詞と認めないもの

1.1.1. 朱德熙 (1980)

朱德熙がかなり前から“的”に関して一連の論文を発表し、そのすべては朱德熙(1980:179、208)に収められている。それによると、“的”は、その前におかれた成分に応じ、形式は同じでも三種の異なる機能を示すという。副詞の後置成分、状態詞の後置成分と助詞である。例えば、“清清楚楚的”では状態詞の後置成分であり、“游泳的”、“便宜的”では助詞であり、述語成分の後ろについて名詞相当語をつくる、としている。

1.1.2. 太田辰夫 (1958)

太田辰夫(1958:351、359)では「連語助詞」(一般にいう構造助詞)として“的”の用法をまとめている。その一つの用法として、「句末において説明の語気をあらわす」と述べている。しかし、「連語助詞」とは別に、「句末において語気を表す」ものを「句末助詞」としてまとめている。さらに現代中国語における「句末助詞」を甲・乙の二類に分けた。その甲・乙のどれにも“的”が含まれていない。

1.1.3. 袁疏林 (2003)

袁疏林(2003:11)の結論は文末にある“的”は語気詞ではなく、構造助詞だということである。理由として次の二つをあげている。

確認語気は疑問形という不確定の誤記を排除するはずであるが、“的”事態文は疑問形をもつ。

語気詞なら第三種の語気詞であるはずだが、現れる順番が違う。

1.2.「的」を語気助詞と認めるもの

伝統的な文法研究では語気助詞と明記してはいないが、“的”を語気を表す助詞と認める説が

語気を表す文末助詞“的”(郭)

多い。また、品詞分類の仕方により、語気助詞ではなく、語気詞と呼ぶ学者(陸検明等)もいる。本稿では、伝統的な品詞分類に従い、語気助詞と呼ぶことにする。

1.2.1. 呂叔湘(2001)

呂叔湘(2001:162)では文末の“的”は語気を表す助詞であると説明し、肯定を強める用法と、事態がすでに発生したという已然を表す用法と、二分した。

1.2.2. 王自強(1984)

王自強(1984:40-41)では“的”を助詞として説明している。“肯定の語気を強め、「本当にこうである」という意味を持つ。判断動詞“是”と呼応してつかうことがある。”と述べられている。

1.2.3. 丁声樹ら(1980)

丁声樹ら(1980)では「陳述の語気は普通語助詞を使わないが、使う時“的”、“了”、“呢”、“罢了”、“么”、“啊”を使う」と述べ、“的”は必ずこうであることを表す、と説明している。

1.2.4. 劉月華ら(1983)

劉月華ら(1983:657)では「“是”と“的”はともに語気を表すが、文によって語気も異なる。強調や断定、固い意志を表すこともあれば、柔らかな語気や婉曲な語気を表すこともある」と書いている。

1.3. 先行研究の問題点

文末に位置し語気を表す“的”に触れた上の二種の説は完全に対立しているように見えながら、その実、語気を表す文末の“的”と文末にも文中にも現れる構造助詞“的”と混合しているところで共通している。

語気を表す“的”は文末以外に現れず、もっぱら話し手の心的態度を表すのに対して、構造助詞の“的”は文における位置も自由で、文構造上で働くものである。両者は現代語における形こそ同じであるが、意味も機能も違うので峻別すべきである。またその峻別によって、それぞれの意味・機能がはっきりと見えてくるのである。

また、語気を表す“的”に触れた説は増えているにもかかわらず、具体的な分析や例文調査に欠け、その語気の意味が把握されていないのが現状である。

2. 考察対象

本稿で考察の対象とするのは次の要件を満たすものである。

“的”が文末に位置し、前へ移動することも、後に体言性成分を補うこともできない。
全体は動詞や形容詞を中心とする述語をもつ。

基本的に過去の時制のものを対象外とする。“的”をアスペクト助詞とみる事もできるので、本稿の考察から除外する。

本稿では、上の条件を満たす文末の“的”を語気助詞とする。文末に語気助詞“的”をもつ文は、述語部分に制限がある。また、文中と文末両方に出現できる構造助詞“的”と異なり、すでに発生済みの事態を表すのではない。将来に向けて継続中の事態か、将来に発生する事態を表す。このような語気助詞“的”は会話の文や地の文、論説文、心理描写の文などに頻繁に用いられる。

筆者は『四世同堂』などの現代小説や日本語からの翻訳小説などを含め調査した結果、この種の“的”がいくつかの文型に集中的に現れることがわかった。次の3節からこの語気助詞“的”が集中的に現れるいくつかの文型を考察し、その意味と機能を分析することにする。

3. 語気助詞の“的”が現れやすい文型

語気助詞は柔軟性の高いもので、イントネーションの影響も受けるので、その意味の分析はかなり難しい。しかし、語気助詞は常に具体的な文につくため、文中のほかの成分（語気副詞や助動詞など）が表す語气的意味と絡み合っており、分析の手がかりとすることができる。そこで、本稿では、具体的な文における語気助詞“的”の現れるパターンをまとめ、考察し、文中の他の語気をもたらし要因とあわせて分析することにする。

語気助詞“的”は次のような文型によく現れる。

3.1. 是 + 動詞・形容詞 + 的

述語の部分に入るのは状態や性質、生理活動・心理活動を表す動詞と形容詞である。あるいは可能や必要などを表す助動詞や、持続の状態を表す時間副詞などである。

上帝是喜欢羔羊的。(百 p.262)

語気を表す文末助詞“的”(郭)

神様は子羊をお喜びになるのだ。(p.147)

“孩子，我们在上帝面前都是有罪的。”(百 p.263)

「子供よ。神様の前では、わたしたちはみんな罪があるのです。」(p.149)

可是，栽培的方法到底是有必要相互磋磨的必要的。(四 2 節)

しかし栽培の方法は、なんとしてもたがいに切磋琢磨する必要がある。(p.14)

在危乱中，他看明白，无聊是可以丧命的！(四 29 節)

乱世のさなか、決め手がないということで、命を失うことがあるのだと、彼ははっきりと見た。(p.327)

不过，灵性是真实存在的。(黒 p.2)

だが、精霊はたしかに存在する。(p.2)

看来，人的热力是能够点燃世界任何冰冷角落的生命的。(黒 p.47)

人間のエネルギーは、世界のどんな冷たい片隅の生命をも燃え立たせるものらしい。
(p.84)

我觉得，像我这样的人是很难彻底理解她们的一切的。(黒 p.64)

そして、自分のような人間には彼女たちのすべてを深く理解することはできないと感じていた。(p.113)

用笑起来象一朵鲜花这句话来形容她，是恰如其分的。(百 p.171)

花のように笑うと言う言葉が彼女にはほんとうだった。(p.171)

“不是吗，喜欢的人应该是可望而不可及的...”(p.33)

「でも、好きな人は遠くから思っているだけのほうがいいのよね、...」(メ p.46)

このような文は構成から見ると、まず一つの完結文に判断を表す“是”をつけ、さらにその後“的”をつけたと考えられる。“的”は“是～”文に作用するのである。根拠はこのような文から“的”を削除しても、さらに“是”も削除しても成立するところにある。

3.2. 会...的

现在是农闲，一早不会有行人的。(雪 p.37)

今は農家が暇だから、こんなに早く出歩く人はいないわ。(p.37)

他明知对于这女子来说不会是徒劳的，却劈头地给了她一句徒劳。…(雪 p.32)

彼女にとってそれが徒劳であろうはずがないとは彼も知りながら、頭から徒劳だと叩きつけると、…。(p.32)

大雁们在忙着安顿一个温暖的巢，它们是不会理睬自然界中那些思虑重重的人的。

(黒 p.5)

雁たちは暖かい巣をつくるのに忙しく、大自然の中で深い思いにとられている人間など見向きもしない。(p.7)

不管婶婶解释，可她还是弄不清生产和雨伞的关系，两者怎么又会联系在一起的。

(百 p.169)

おばさんがいくら説明しても、出産と傘のとりあわせ、両者がどうして結びつくのか、彼女にはさっぱりわからなかった。(p.64)

“不要紧，兔子总会好的。”(百 p.85)

「だいじょうぶ、兎はかならずよくなる」(p.38)

妈妈不在，伯伯在这种时候，照例不会蹲在家里的。(百 p.249)

母さんはいないし、おじさんは、こんな時じっとしているはずがない。(p.134)

呂叔湘(2001:278、279)は“会”の意味と用法を助動詞として可能性を表し、“不会不”として可能性がたいへん大きい“一定”の意味に近い、としている。このような“会”は“的”と一緒に現れるのが普通である。特に否定文の場合がそうである。

3.3. 要/得...的

恐怕要和吧？怎么和呢？华北恐怕是要割让的吧？(四 31 節)

恐らく戦争をやめるのじゃないか。どういうふうにやめるか。華北はおそらく割譲されるのだろう。(p.329)

語気を表す文末助詞“的”(郭)

而天皇也得拍一拍他的肩膀，叫他一声老弟的。(四 37 節)

それから天皇もかれの肩をたたいて「ねえ、きみ」と呼びかける日も来ることでしょ
う。(p.86)

再说，你早早晚晚也要对我生厌的。(p.7)

そしてあなたはいつか私にうんざりするのよ。(ノ p.14)

“要”“得”のような助動詞は「そうなる」「しなければならない」という意味を表し、将来
のことの実現性を示唆している。

3.4. 的

「是」が現れず、「的」が単独に文につく場合である。

“瞧，咱队长倒看到了熟人，咱那个大妹子，怎么偏偏找不到她那个人的呢！”

(百 p.206)

「ほら、隊長は親しい人にめぐり会ったのに、うちの娘にかぎって、どうしていい人
が見つからないんだろうね。」(p.105)

“不偏离的。”…“不要紧的，你。”…(p.6)

「離れないよ」…「でも大丈夫よ、あなたは。…」(ノ p.12)

“那不是的。”(p.28)

「そうじゃないよ」(ノ p.45)

没关系，放心。饭菜来了，过去也不迟。无所谓的。(p.61)

いいのよ、べつに。料理が来たら戻るから。なんてことないのよ。(ノ p.94)

ここに現れる述語は可能性や否定を表すものである。会話文に現れるが、女性、とくに若い
年代層の女性が好んで使う。このような文には「是」が使われない。これは、「的」が「是」に
依存しないことがもっとも明白な場合である。

3.5. 老 / 挺...的

老 + 四字語 + 的

你怎么老慢慢腾腾的。

何でいつもぐずぐずしているの。

老李老红光满面的。

李さんはいつも顔が赤くてつやつやしている。

老 / 挺 + 形容詞 + 的

太阳都老高的了，还不起来？

お日様はもうずいぶん高く昇ってるよ、まだおきないの。

路老宽老宽的。

道はかなり幅が広いよ。

“不过，能和你说话，挺高兴的。”(p.23)

「でも君と話ができてよかったよ。」(ノ p.38)

挺 + 助動詞 + 動詞 + 的

我挺想去的。

私はとても行きたいよ。

他挺爱看外国电影的。

彼は外国の映画を見るのが好きです。

ここで“老”と“挺”ともに程度が高いことを表す。副詞として述語部分を修飾するときによく文末の語気助詞“的”と一緒に現れる。

語気を表す文末助詞“的”(郭)

3.6. 够...的

够 + 単独の動詞 + 的

“也够吃的！干疙疸，老咸萝卜，全还有呢！”(四1節)

「それもたっぷりです。からし菜の根漬け、古漬け大根、みんなあります。」(p.8)

文字不够他用的；一找到文字，他便登时限制住了自己的心灵！(四33節)

文字は彼が用いるのには不十分なものだった。ある文字をさがしあてると、彼はすぐ自分の魂にワクをはめてしまう。(p.378)

马家有几亩地，可是不够吃的，多亏大少爷在城里法院作法警，月间能交家三头五块的。

(四35節)

馬家は何段歩かの畑をもっていたが、暮らしてゆくのに足りないので、その長男が城内の裁判所で巡査を勤めて月々三元、五元と仕送っていた。(p.55)

够 + 動詞 + 数量詞補語 + 的

“他们赢了我八十！够吃那么四回的！”(四28節)

「彼らは僕から八十元もまきあげたんだ！あの料理の四回分だ！」(p.302)

看看！这是烧饼？还不够吃两口的呢！(四79節)

ごろうじろ！これでも焼餅じゃ。ふた口にもたりない！(p.263)

够 + 動詞 + 目的語 + 的

整个的北平变成了一只失去舵的孤舟，在野水上飘荡！舟上的人们，谁都想作一点有益的事情，而谁的力量也不够拯救他自己的。(四6節)

船上の誰も役にたつことをしようと思ったが、誰の力も自分を救うのに不足していた。

(p.47)

他深怕自己的才力太小，不够巴结冠先生的了！(四23節)

彼は、自分の才や力があまり小さくて、冠先生にとりいる資格がないのではと思った。

(p.229)

够 + 動詞 + 数量詞 + 目的語 + 的

他们愿意回家，他们家里有地，够他们吃两顿棒子面的。(四 38 節)

かれらの家には畑があって、日に二回とうもろこし粉を食うぐらいには、ことかかなかった。(p.92)

一丈布不够作一身男裤褂，也不够作一件男大衫的。(四 59 節)

一丈の布では男のはかま一枚つくれないし、男物のひとえ上着一枚できない。(p.87)

够 + 主格 + 動詞 + 的

二爷的收入将将够他们夫妇俩花的，而老三还正在读书的时候。(四 4 節)

瑞豊の収入は、彼ら夫婦の使い分だけで、三男の瑞全はまだ学校だから、・・・。
(p.32)

“你等我事情稍好一点，够咱们花的，再分家搬出去呀！”(四 10 節)

「仕事がもうちょっとうまくいけば、充分お金も使えるし、分家して引っ越そうよ。」
(p.82)

他有本事，而且生活又非常的简单，所以收入虽不多，而很够他自己花的。(四 38 節)
かれは手腕があったし、生活も簡素であったから、収入は多くなかったが、ひとりで使うにはありあまるほどであった。(p.105)

够 + 主格 + 動詞 + 数量詞 + 的

长在树上是个玩艺儿！我带回家去，还不够孩子们吃三口的呢！(四 15 節)

木にあるからいいのだ！わしが持ってっても、子供が食べるのにもたりないよ！
(p.133)

够 + 形容詞 + 的

可是，只要老人有这么个报仇的心思，也就够可敬的了。(四 27 節)

しかし、老人にこのような報復の気持ちがありさえすれば、充分尊敬に値する。
(p.292)

他已够苦痛的了，没心陪着孩子们说笑。(四 28 節)

彼はもう充分苦しんでいて、子どもたちに冗談を言う気はなかった。(p.310)

語気を表す文末助詞“的”(郭)

“够”の意味について呂(2001:234~235)は次のように説明している。

動詞:1.必要な数量・標準・程度などに達する。“了”をつけることができる。

c) 够 + 動詞。動詞は1音節が多い。

d) 够 + 小句。

副詞:1.形容詞を修飾し、一定の基準に達することを表す。形容詞はプラスの意味のものに限り、その反対語は使えない。

2.形容詞を修飾し、程度の高いことを表す。形容詞はプラスの意味のもので
もいいし、マイナス的なものでもいい。文末に“的”や“了”をつけること
が多い。

この説明にはいくつかの問題点がある。まず、形容詞を修飾する場合だけを区別して副詞と
みるのは少し根拠がたりない。副詞は動詞を修飾することもできるのである。そして、プラス
の意味の形容詞の場合だけ文末に“的”がつくというのは、上にある大量の例文を見ればわか
るように、「够 + 動詞」の場合も「够 + 小句」の場合も、“的”を伴う事が多い。

ここでは、「動詞 + 的」に程度・量が省略された名詞句とみることはできるのではないかとい
う疑問があるかもしれないが、“的”をつけないで動詞だけでも成立し、疑問などの形になるの
である。ゆえに、語気助詞の“的”がついたとしか考えられない。“的”がついたままの形では
疑問文にならない。

4. 語気助詞“的”の意味・機能

上述した文型に現れる“的”は常に文末に位置し、文の内容である命題に付加される形で話
し手の何らかの心情・態度を表しているものである。この類の“的”を主に文中に現れる「構
造助詞」から峻別すれば、その意味・機能ははっきりと現れてくる。先行研究では範囲がはっ
きりしていないものの、語気を表すと認める説をまとめれば、肯定などの語気を強めるとい
う「強調」説と、確信の語気を表す「確認」説、柔らかな語気や婉曲な語気を表す「和ら
げ」説、の三種がある。と は強調として一致しているが、は反対の意味になっている。
一体、語気助詞“的”はどのように機能し、その根本的な意味はどこにあるのだろう。

4.1. 主部と述部の均衡を取るための手段

文の中で主語が長く述語が非常に短い場合、主語と区別し、主語・述語の均衡をとるために
述語に付加成分として“的”をつける。この場合では“是”が必ずしも必要ではない。

日本の神戸牛肉驰名世界,但能吃到地地道道的神戸牛肉的餐厅还是不多的。

日本の神戸牛は世界的に有名ですが、正真正銘の神戸牛を食べさせる店はそう多くありません。

当然，蛋糕与时间不能等同而言，然而下班从公司出来，那种犹豫的感觉却是相似的。

(pp.1 ~ 2)

ケーキと時間とは同じにできないかもしれないが、会社を終わったときの浮き立つ気持ちはそれに近い。(メ p.8)

这样长、这样深的梦是没有的。(百 p.273)

こんなに長く、こんなに深い夢はあるはずはない。(p.159)

上のような例文では、この手段を使わない場合、主語が長々と続いてどこから述語なのかわかりにくい。そして、述語が短くてすぐ終わってしまう。文全体が竜頭蛇尾の格好になってしまう。

日本の神戸牛肉驰名世界,但能吃到地地道道的神戸牛肉的餐厅还不多。

然而下班从公司出来，那种犹豫的感觉却相似。

这样长、这样深的梦没有。

このような問題を避けるために、語気助詞の“的”を、場合によっては、更にその前に“是”を付け加え、文全体の格好を調整し、述語部分に重みを増やす。そして、“的”などを付加したからには何らかの意味合いの変化が起きるはずだということから、「強調」や「強い主張」というふうに感じられるのである。

この点に関して先行研究では指摘が見られない。孤立語である中国語は、文法的手段である助詞の数が少ない。この場合、その少ない助詞をうまく利用し、文を理解しやすいように工夫をしているのである。

中国語以外の言語にも似たような手段が使われている。吉田(1988:51)は「のだ」の一つの用法として次の例を提示し、「整調」と名づけ、「あたかも単に語調を整えているだけであるかのように見える」と説明している。

或いは、「合意とは一九〇五年の『保護条約』を指す」と主張するかもしれない。だがそれこそ事実誤認なのである。(p.51)

語気を表す文末助詞“的”(郭)

4.2. 認識のギャップを解消するための手段

これは語気助詞“的”の基本的な意味である。語気助詞“的”が使われるのは、話し手が聞き手と自分の間に認識のギャップが存在していることを感じる場合である。その認識上のギャップを解消するために事態を述べた後に語気助詞“的”を加えて発話する。「～と思わないで」「～ではないよ」という意味合いを相手に伝達する。つまり、相手の考えや予測を否定し、自分の意見を強く出す。相手に反論の余地を与えない言い方である。この聞き手は自分であってもいい。自分の今までの考えが違っていたと強く表出する。こういうニュアンスが含まれているので、普通の叙述文より文の内容が強調されることになるのである。いままでの「断定を強調する」や「肯定を強調する」や「確信する」などの説の根本がここにある。

这道习题我懂的。

この問題はわかるよ。(私が分からないと思わないで。)

船是一定借不到的,现在哪个队不在积肥,不在用船。(百 p.237)

舟は借りられっこない。いまはどこの隊でも堆肥作りに舟を使っている最中だ。

(p.121)(借りられると思ったのが間違いだ。)

看来,人的热力是能够点燃世界任何冰冷角落的生命的。(黒 p.47)

人間のエネルギーは、世界のどんな冷たい片隅の生命を燃え立たせるものらしい。

(p.84)(いままでそんなことはできないと思っていたのは間違いだ。)

“ 不管怎么说,你是喜欢的喽 ”(p.16)

「でもとにかくそういうのがすきなんだね?」(ノ p.28)

(あなたが口で否定しているようなことではなく)

上の最後の文を例にみれば、この文は聞き手が「いや、そういうんじゃないくて...」という言い訳をしているのを受けて、話し手が“的”を用いそれを否定した発話をしたのである。

4.3. 陳述の語気

形容詞文や動詞文は状態や動作を描写する描写文になるのが普通である。その場合、発生している、あるいは、発生した事態を描写し、その一時的な状態や動作を表現しているのである。

その現在、あるいは、過去における一時的なものではなく、長期間継続するものとして捉え、表現しようとする場合、“的”が使われる。事態描写文を陳述文 習慣、認識、公理などを表す文にするのである。その文の表す内容は一定の期間、もしくは、永遠に変わらないものである。特に論説文などで、作者の一時的な描写や判断ではないというニュアンスをだし、信憑性を高めるのにこの“的”を広く使用している。これは「和らげ」などともいわれるものである。

雪很白。

（目の前にある雪を見て）この雪は白い。

雪是白的。

（雪の性質などについて説明する時）雪は白いのです。

“美极了！石林是中国著名的旅游胜地之一，那里的景色你在别的地方是看不到的。”

（中 p.51）

「本当に綺麗でした！石林は中国の有名な観光地の一つで、あの景色はほかの場所ではみられませんよ。」（p.51）

钱在自己的口袋里是和把狗栓在屋里一样保险的。（四 14 節）

金は、犬が家につながれているように、自分のポケットに守られているのだ。（p.123）

历史不会饶恕他们的。

歴史は彼らを許すことはないのだ。

5. 他の終助詞との接続

語気助詞“的”がほかの語気助詞と接続するときに前に位置する。つまり、命題に一番近い方、内側に位置する。“的”と一緒に現れるのは、主に“呀”、“呢”、“哟”、“喽”などのような語気助詞である。

第三，夏天的饭食也许因天热而简单一些，可是厨房里的王瓜是可以在不得已的时候偷取一根的呀。（四 41 節）

第三には、夏の食事は暑いせいか簡単であるかもしれないが、お勝手の王瓜は、ほかにしかたのないときには、こっそりつかむことができるのだった。（p.135）

“可是人并不是这样的呀，...”（p.34）

語気を表す文末助詞“的”(郭)

「ところがそうはいかないんだなあ、…」(メ p.47)

“口红，要粘上的呀。”(P17)

「口紅がつくわよ」(メ p.26)

“是呀，我们东北地方人，外表大大咧咧的，内心其实是十分富有浪漫气质的呢。”(p.29)

「そうよ、東北人は外見はもっそりしていても、本当は大変なロマンチストなのよ」

(メ p.41)

死人は哭不活的哟！都住声！(四 17 節)

死んだ人は泣いて帰るもんでないぞ！みんな静まれ！(p.156)

“不管怎么说，你是喜欢的喽”(p.16)

「でもとにかくそういうのがすきなんだね？」(ノ p.28)

袁疏林(2003)で「“的”が語気詞なら第三種である」と述べているが、朱徳熙(1980)の説に基づいていると思われる。しかし、朱徳熙(1980)では“的”を語気を表す助詞として認めていない上に、その語気詞互いの共起を認めないという分類方法にも問題がある。語気助詞の分類は本稿の内容ではないので、深く言及しないが、語気助詞は何種に分けるかに関係なく、互いに共起できることは事実である。

また、語気助詞“的”はかならず他の語気助詞の前に現れるということは、“的”が事態めあての語気助詞であり、後ろにある他の語気助詞によって文全体の語気が決められるということである。

おわりに

語気助詞“的”は常に文末に位置し、文の表す事態に対する話し手の態度を表す。“是”、“够”のような副詞、“会”、“能”のような助動詞と呼応して決まった文型に現れる。語気助詞であるため、文から“的”を切り取っても文の意味(命題内容)は変わらない。これは構造助詞の“的”との根本的な違いである。この文末の語気助詞“的”は主部と述部の均衡を取るため、そして、認識のギャップを解消するため、描写文を陳述文にするために機能する。その意味はその現れる文型に依存し、基本的にその文型が持つ各種の意味を強調する。論述文などで多用され、事態描写などの文を陳述に変えることによって、発言の重みと信憑性を増やす。

語気助詞“的”は他の語気助詞と共起することができるが、共起する他の語気助詞の前に現

れる。語気助詞の中で、一番命題に近い位置に現れるものである。

語気助詞“的”がなぜ決まった文型に集中的に現れるのかについて、まだはっきりわかっていないが、その歴史的成立と関連があると思われる。この問題は今後の課題として、研究を続けたいと思う。

<参考文献>

太田辰夫(1958)『中国歴史文法』江南書院

朱德熙(1980)『現代漢語語法研究』商務印書館

丁声樹他(1980)『現代漢語語法講話』中国語文雜誌社編 商務印書館

井上ひさし(1981)『私家版日本語文法』新潮社

王自強(1984)『現代漢語 虚詞用法小詞典』上海辞書出版社

吉田茂晃(1988)『ノダ形式の構造と表現効果』『国文論叢』15号神戸大学

森山卓郎・仁田義雄・工藤浩(2000)『日本語の文法3 モダリティ』岩波書店

劉月華・潘文娛・故韓(1983)『實用現代漢語語法』外語教学与研究出版社

張静(1984)『漢語語法問題』中国社会科学出版社

張斌(2000)『現代漢語句子』華東師範大学出版社

呂叔湘(2001)『現代漢語八百詞 増訂本』商務印書館

宮崎和人・安達太郎・野田春美・高梨信乃(2002)『新日本語文法選書4 モダリティ』くろしお出版

袁毓林(2003)『从焦点理論看句尾“的”的句法語義功能』『中国語文』03・1

主指導教員(船城俊太郎教授) 副指導教員(大石強教授・中西啓子教授)